

『鎌倉佐弓の俳句世界』

サントシユ・クマール編『The Haiku of Sayumi Kamakura: A critical Study 鎌倉佐弓の俳句世界』Cyberwit社 (www.cyberwit.net) 二〇一〇年発行 一五米ズル Ispn 978-81-8253-164-2

Hidaki Ishikura
石倉 秀樹

インドのサイバーウィット社から大変な評論集が出版された。鎌倉佐弓の俳句作品をめぐって、世界の十六人の詩人、俳人の評論を集めたもので、評者が住む国々は東から西へ、ニュージーランド、インド、ロシア、ルーマニア、ブルガリア、ノルウェー、英国、アルゼンチン、アメリカにわたり、地球を一巡して日が沈まない。

日本の一俳人の作品をめぐって世界の俳人が評論を展開するという点、実はこれが初めてではない。この本の編者で自らも鎌倉の俳句を評論しているサントシユ・クマールには、すでに『The Poetic Achievement of Ban'ya Katsushū: 夏石番矢の詩的業績』の編者としての実績がある。しかし、『夏石番矢の詩的業績』は全部英文。それに対し、『鎌倉佐弓の俳句世界』は、英文とその和訳つき。そこで、日本語の俳句論集が、インドで刊行された、といつてもよい。

この快挙を、どう理解したらよいのだろうか。最初に思うべきは、ひとりの俳人をめぐって複数の論者の評論集を出そうとするときに、世界的な視野のもとで十数人の論者を選び寄稿を働きかけることができる、という能力が、俳句の母国である日本ではなく、インドにあったということだ。編者サントシユ・

クマールは、リトアニアのヴィルニユスで鎌倉の「思索、情熱、そして癒されるような声の融けあっている」朗読を聴き、「彼女が現代俳人として世界における最高峰の一人であることを改めて確信し」「鎌倉佐弓のような重要作家には評論集が必要なことを悟った。」そして、彼は、

「彼女の俳句を学究的に出すべきだ。」

「鎌倉佐弓は世界的な名声と評価を受ける資格がある。」
と思う。

なんと大胆な発想。鎌倉が「世界における最高峰の一人である」という認識は、彼女の朗読を聴く前にテキストを読み込んでいたからで、だから、「改めて確信」であるのだと思うが、サントシユ・クマールの発想には、俳句を論じようとするにあたって、「世界」という発想が最初からある。彼にとつて俳句は「世界」が舞台であり、「世界」を跨ぐ発想で論じられなければならないのだ。

そこで、巻頭に鎌倉の「俳句が日本の俳人だけの専有物でなくなる日はいつかやって来る。その日のために、すぐれた日本語の俳句を世界に発信したい」という言葉があることが、改めて目を引く。この言葉を巻頭に置いたサントシユ・クマールは、「俳句が日本の俳人だけの専有物」ではないことをすでに悟っている。

それにしても、なぜ俳句は、日本の俳人だけの専有物ではないのだろうか。俳句は詩である。詩は翻訳不可能である。そこで俳句もまた、翻訳不可能のはず。

しかし、俳句は翻訳可能だという答えが、『鎌倉佐弓の俳句世界』のなかにあった。

俳句には限界がありません。だから英訳や他の言語に翻訳するのは難しくないと思います。佐弓の句集も色々な言語に翻訳されています。何語になっても彼女独特の

感性は残っています。(フロリアナ・ホール)

私は言葉自体が重要なのではなくて、そのなかに秘められていた力こそが重要なのだと理解した。

(マルク・カーバー)

ここに述べられていることは、詩としての俳句の核心は、それが何語で詠まれているか、その言語の特性を生かして詠まれているか、などの修辭的な表層にあるのではなく、何語でどのように詠まれたとしても失われない詩的生命にあるのだ、ということだろう。そして、俳句という詩形式には、たとえ翻訳されたとしてもその詩的生命を損なわれにくい、そういう特性があるということだろう。その限りにおいて、であるかも知れないが、俳句の核心は、確かに翻訳可能なのだ。

そこで、鎌倉の俳句の核心が、修辭的な表層である言語の壁を超えて世界の詩人、俳人に、どう受け止められているか、が興味深い。

俳句は縮写するものだという思い違いが残念ながら多いなかで、盆栽のあの秘法のように実物よりも大きいものに描き変える才能がこの作者にはある。

(A・D・パウエル)

鎌倉佐弓は決して説明や解説をしない。言葉だけで十分なのだ。ウィリアム・ブレイクが言う「認識の扉」を持つのは言葉だ。(フラム・シヨール)

鎌倉佐弓の俳句は丁度、独特で繊細な香気を持つ花びら、また句ごとに美しさを見せる菊の花である。

(マグダレナ・ダル)

われわれは彼女の作品に巨匠、すなわち松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶の影響を見ることができ。禁欲的な芭蕉のように真理の探求と神へと響きあう句を彼女は作る。打ち出すイメージは絵師俳人蕪村のように鮮烈だ。

(サルバトール・バタッチ)

サルバトール・バタッチの評は、季語と文語と五七五という俳句の日本語にとらわれている者にはわかりにくいかも知れない。しかし、その修辭的表層を取り去って核心に触れれば、鎌倉の俳句が、いかに先人が獲得したものを継承しているかが、見えてくる。なるほどと思う。

さて、これまで見てきたのは、鎌倉の俳人としての全体的な特徴をめぐるので、個々の句をめぐるものではない。しかし、『鎌倉佐弓の俳句世界』は、サントシユ・クマールの編集方針にも沿って、「各評論には鎌倉佐弓の俳句が引用されており、語釈が加えられて」おり「彼女の俳句そのものに対して読者の関心が湧く仕組みになっている。」

英文九八ページ、和文一五〇ページに全一四九句。これだけの句が載せられていれば、評論集ではあるが、たしかに句集でもある。そして、引用されている俳句の解釈に評者の俳句をめぐる理解の深さを測る尺度があるとすれば、鎌倉がいう「俳句が日本の俳人だけの専有物でなくなる日は」、もうやってきている。『鎌倉佐弓の俳句世界』に満載の世界の詩人、俳人の句評は、そのことがくつきりとわかる一冊になっている。

最後に、四人以上の評者が引用し句評の対象とした句を、参考までにあげておきたい。

永遠が見えそう枯木立ゆかば

神あるいは日輪という寒き円

われに棲む馬鹿と阿呆と夕明かり

いつか膝きつとまばゆき雲まとう

夏の果てスポンジに水がしがみつく

ペランダの光は風のうえて休む

ポストまで歩けば二分走れば春

水を渡り山越えるべし希望まで

われらの声あかるくあれようろ雲